

U先生のこと

梅原 恭則

定年退職に際しては一方ならぬお心遣ひを頂き、お礼の申し上げやうもありません。皆様の御厚情は生忘れすることは出来ません。心から感謝申し上げます。

以来約五ヶ月、生活の変革から来る疲れからか、五月から六月にかけて一時体調を崩したものの、その後は何とか元気に毎日を過してゐます。

退職後の隠居生活は長年の夢でした。さあ思ふ存分好きな本が読めるぞ、と自分勝手な計画を立てゝゐたのです。ところが、実際に五ヶ月過して思ひ知つたのは、それが何と甘い考へであつたかといふことです。

確かに、職務に追ひ回されることはもうありませんが、現実の生活はさう暇ではなかつたのです。あれこれと為さねばならぬことがあつて、むしろ実感としては、仕事をしてゐた頃とさう変らぬくらゐ忙しい。人生、思ふやうにはいかないものです。

でも、そんなことに負けてはゐられません。今『論語』

を読み始めてゐますが、少しづつでも毎日良い本を読んで、これからの人生を充実させていきたいと思つてゐます。

そんな中で、我ながら意外でもあり不思議でもあつたのは、授業開始の時間になると決つて、学生諸君が教室で待つてゐる、行かなくては、といふ切迫感に襲はれたことです。授業に出てゐた何人もの顔が、目の前にちらつくのです。思はず椅子から立ち上りさうになつたことすらあります。こんなことをしてゐてはいけないのではないか、などとあらぬことが頭に浮んで、落着かない変な氣持になつてしまふのです。

最初は本当に吃驚しましたし、そんな自分を宥めるのに苦労しましたが、その反面、秘かに嬉しさを噛み締めたりもしました。それが学生諸君からの贈物のやうにも思へたからです。私には、学生諸君との切磋琢磨の時間が、特に最近の数年間は、充実した楽しいものでした。諸君の方では、辛く苦しい、ひよつとすると地獄のやうな時間だつたかもしれませんが、そんな意味でも、下手な授業に文句も言はず（？）付き合つてくれた学生諸君に、感謝しなくてはなりません。

そんな状態が二ヶ月程続きました。最近では隠居生活の

時間の流れにも大分慣れて、どうやつて読書の時間を確保しようか、などと能天気なことを考へるやうになりましたが、その一方で、高校時代にお世話になつた恩師のことがしきりに心に浮んで来ます。無意識のうちに、造船所勤務から教師へと進路を変へた自分の人生を振り返つてゐるのかもしれない。そこで、紙面を与へられたのを機に、恩師であるU先生のことを、思ひ出すまゝに書いてみようと思ひます。

先生は、諸君と同じ教育学部（長崎大学）を卒業なさつた方で、卒業後は高校の国語教師をしてをられました。私は偶々その高校（夜間高校。三菱造船の社内学校卒業生は、特例として二学年編入を認められた）で、二年、三年の二年間だけ国語の授業を受けたのですが、以来私は、先生が最も優れた国語教師の典型たる方だと信じて疑ひません。その点で、U先生の話は、教師を目指す国語科の学生諸君にも参考になるのではないかと思ふのです。

初対面のU先生の印象は、正直に言ふと余り芳しいものではありませんでした。いかにも弱々しきさうな瘦せた体で教科書や参考書を抱へて、俯き勝ちに教室に向ふ先生の姿は、初めて接する高校生には、どう見ても颯爽と

したものではありません。当時先生はまだ三十代の前半だつた筈ですが、その時の私達には定年間近の先生かと思つて見えたのです。

ところが、いざ授業が始まつてみると、その印象は見事に一変します。訥々とした語り口だけは予想通りなのですが、その授業は熱意に溢れて懇切丁寧、平明かつ理路整然としてゐて、間然するところがないのです。私達は、その見事さに圧倒され、先生の説明を一言も漏らすまいと、必死になつて耳を傾けました。

クラスには当然国語の嫌いな者もゐますが、不思議なことにU先生の授業だけは一人残らず真剣に取り組みました。夜間高校で昼間は全員働いてゐますから、自分の自由に使へる時間など知れたものです。それなのに、国語は予習が大事だと先生に言はれれば、何とか時間をやりくりして国語の予習だけはやつて来る。ノートの作り方が肝要だと言はれれば、役に立つノート作りに各自工夫を凝らす。勿論、時間の制約の上には仕事による疲れもありますから、出来る範囲でのことですが、クラス全員がさうすべく努力したことは確かです。

先生の授業には幾つかの特徴があります。一つは、説明の根拠が必ず文章中の言葉にある、といふことです。「この表現は、この言葉とこの言葉がこのやうに繋げら

れて成り立つてゐる。最初の語はこんな意味の語だ。次の語はこんな意味だ。だからこの表現は、こんなことを言つたものといふことになる。」といふやうに、言葉を大切にし、それだけに基づいて文意を読み解く、それが先生の方法です。文章は言葉だけから成り立つてゐるので、すから、それは文章の本質に最も忠実な、正しい方法だと思ひます。

したがつて、先生の授業は、極めて論理的な、曖昧さを極度に排したものになります。教材文中の一語一語に對する解読から文章全体の読み取りに到る筋道が、恰も出来の良い推理小説のやうに、的確な論理性を持つてゐるのです。それは、聞いてゐる私達の側から言へば、「うんうん、なるほどさうだ、その通りだ。」と、納得するばかりです。みんなが先生の授業に進んで耳を傾ける筈です。説明がよく分り、十分に納得出来るのですから。

先生から受けた授業で今もはつきり印象に残つてゐるのは、『源氏物語』の『桐壺』の巻の授業です。この巻は、周知の通り、『長恨歌』に詠はれた「楊貴妃」の故事を下敷きにして書かれてゐますが、先生は『長恨歌』の全文を解読し、その一つ一つの表現と照らし合せながら、『桐壺』の巻の読解を進めたのです。相手は昼間働いてゐる夜間高校の生徒です。何とレベルの高い授業をなさ

つたものだと思ひますが、当時の私達は嬉々として二つの文章に取り組みました。難しいなんて少しも思はず、「楊貴妃」と「桐壺の更衣」の悲しみに心から同情し、『源氏物語』の文章の奥深さに感激したものです。

漢文の授業でも、同じやうなことがありました。週一時間だけ漢文の授業があつたのですが、先生は、教科書に書かれた訓詁法の説明では足りないと言つて、全員に参考書を与へて勉強させ、その上で返り点のない白文だけのテキストを使つて訓詁の実践を繰り返させたのです。教科書に出てゐるものだけ教へれば済むといふのではなくて、漢文を読む為の眞の実力を付けることを考へてをられたのでせう。お蔭でその後私達は、どんな漢文に對しても、さう抵抗感を感じずに読めるやうになりました。

かう続けて来ると、U先生の授業はいかにも難しさうな授業だと思はれるかもしれせん。それに、先生の授業は殆ど、教科書と手作りのプリントだけを使つた、地味な授業です。しかし、私達には、高校生活で一番楽しい、充実した授業でした。恐らくそれは、よく分り納得出来るからなのでせう。どんなことでも、先生の解説は、仕事で疲れた私達の頭にもすらりと入るのです。それは先生に對する絶対的な信頼感に直結します。「先生の言ふ

通りにやれば、俺達でも文章がちゃんと読めるぞ。実力も付くぞ。」といふ訳です。さうなるとしめたもので、決して楽の出来る授業ではありませんでしたが、私達は先生の授業を辛いと思ふどころか、楽しみにするやうになつたのです。

面白いもので、さういふ私達の思ひは、高校卒業後如実に現れます。卒業後のクラス会で専ら話題に上るのは、他の誰でもないU先生のことなのです。「こんなことがあつた。あの時は実はかうだつたのだ。」などと、クラス会の度ごとに先生の話で盛り上ります。何人ものクラスメイトが卒業後も先生のお宅に伺つてゐることも、先生との只事ではない関係を物語つてゐます。教科担当といふだけのU先生が、クラス担任だつた先生（申し訳ないことだが、もうお名前も思ひ出せない）やその他の先生方を差し置いて、私達の信望を一身に集めてゐたのです。

さういふことから、その影響力にも大変なものがあります。私の心には、ふとしたはづみに、土井晩翠の『星落秋風五丈原』や北原白秋の『落葉松』の詩句が浮びます。決戦の地「五丈原」で死の病に冒されつゝ懸命に戦ひの指揮を執る「諸葛孔明」の悲愴な姿や、浅間山を背景にした落葉松林における季節の移ろひの美しさに心奪はれ、それを見事に詠ひ上げた詩の日本語の格調高

さに心洗はれる思ひがするのです。

中でも『落葉松』は、信大に赴任したての頃、これ幸ひとばかりに、軽井沢や浅間山の辺りを落葉松の姿を求めて歩き回つたことを覚えてゐます。この詩に出会つて以来、「落葉松の林を実際に見てみたい。詩に詠はれた小路を自分も歩いてみたい。」と思ひ続けてゐたのが、やつとその地に立てたのです。以来何度となく出掛けて、季節ごとに微妙に変化する落葉松林の美しさに酔ひ痴れ、詩に描かれた情景を思ひ浮べては白秋の詩の世界に彷徨つたものです。

どちらも、U先生の授業で出会つて、心に刻み込まれた詩です。それも、もう五十年近い昔の話です。先生の授業で、私は詩の世界に目を開かされたのです。詩に接したことすら殆どなかつた高校生が、それから好んで詩を読むやうになりました。今思ふと微笑ましくなるやうな話ですが、ニキビ面の高校生が二人揃つて、ボードレールの詩集を買ひに行つたりもしました。

そして次第に、詩とはどのやうなもので、詩の言葉がどれほど研ぎ澄まされた繊細なものか、人にどんな恵みを与へてくれるのか、などといったことを考へるやうにもなりました。和歌や俳句などを含めた広い意味での詩が、その後の私の人生に彩りと味はひを与へてくれるや

うになつたのは、詩とかうした出会ひがあつたからです。それも、先生の授業が導き与へてくれたものなのです。

思ひ出すまゝに書き連ねて来ましたが、きりがないのでこれでやめておきます。たゞ、一つだけは非触れておきたいのは、さうしたU先生の、教師としての生き方についてです。先生は、こゝに幾つか紹介した通りの、実に中身の濃い充実した授業をなさいましたが、先生の日常生活も、昼間仕事をしてゐる夜学生には、俗世間とは切り離された別世界のやうな魅力に溢れてゐました。

その後私は先生のお宅に何ふやうになりましたが、そこでまづ驚いたのは、本の量です。六畳程の先生の書齋は、壁一面に天井まで本棚がしつらへられてゐるのですが、それが文学全集を初めとする各種の本で溢れ返つてゐます。それどころか、先生の机の周りにも多数の本が積み重ねられてゐるのです。そして、お伺ひする度に本の話です。日本文学の話、世界文学の話、古典の話などなど。ユング心理学の解説をして下さつたこともありました。「本を読みなさい。そして考へなさい。考へるから我々は人間たり得るので、考へなければそこの動物と何ら変りがない。」といふのが先生の持論で、時には壁の

本棚を指さして「君もこの文学全集（百冊）を全巻読むといい。」などとおつしやつたりもしました。

先に書いた通り、授業を通して、先生は様々なことを教へて下さいました。そしてその前提として先生に、教育に対する熱い情熱と、私達生徒に対する深い愛情があつたことは、言ふまでもありません。しかし、いい授業は情熱や愛情だけでは成り立ちません。U先生は、このやうな膨大な蓄積があるからこそ、あんなにすばらしい授業が出来たのです。本を愛し、そこで得た知見を咀嚼して自分の物とし、その蓄積を授業に生かす、これが先生の授業に対する取り組み方だつたのです。

しかし、もつと驚いたのは、「意図して夜間高校の教員をしてゐる。」と先生から聞かされたことです。そしてそれは何と、「夜学の教員は、夕方までに学校に出れば良から、それまで自分の勉強が出来るんだよ。」といふ理由からだつたのです。尤も、厳しい競争の時代に何時までもそんなことが許される筈はなく、私達が四年になつた年に先生は、残念ながら、県下有数の進学校に転勤なさいました。

そのことを告げる時の先生の寂しさうな顔が今も目に浮びますが、そんな理由で職場を選択する先生に、私は今もつて驚きを禁じ得ません。自分の勉強を絶えず続

ける。その時間を確保する為に敢へて夜間高校に勤務する。これこそが、先生の教師生活を根底で支へる、先生だからこそ為し得る生き方だったのです。先生にとつてそれは、自己の欲するところを為すといふ、それだけのことだったのかもしれないませんが、それは同時に、いい授業をする為に欠かせない営々たる努力でもあつた筈です。勉強と言へば、私はU先生の御自分の為の勉強に少しだけ触れたことがあります。ある時先生が「今うちの子に、こんなことをやらせてみてゐるんだよ。」とおつしやつて、手作りの漢字カードを見せて下さつたのですが、それは石井方式の漢字学習カードだったのです。石井勲氏の漢字学習法については、私も大学の授業で毎年必ず紹介して来ましたから、諸君にも記憶があるのではないかと思います。その方法を一人で試してをられたのです。

勿論、当時の私にそれが石井方式などと分る筈はありませんが、その教育効果の程を、一つ一つ具体例を示して嬉しさうに説明して下さつたことを、今も昨日のことのやうに鮮明に覚えてゐます。しかも、後に考へ併せると、それは石井氏の教育方法が世間にそれ程認知されてゐない時期のことで、その点でも先生の勉強の程が偲ばれます。先生は、このやうにして一人コツコツと勉強

を続け、その成果を携へて授業に臨んでをられたのです。

こゝにはU先生の授業についてだけ書くつもりでしたので、敢へて触れませんでした。私は個人的にも、言葉では表し尽せない程大変お世話になりました。大学進学を志して会社を辞めた夏休みに、しばしば自宅に伺つて勉強の面倒を見て頂いたこと、現役高校生なのに特例として予備校に入学させるべく動いて下さつたこと、授業を受けてゐない日本史で大学受験しようとした私に、友人の教師に依頼して特訓を受けさせて下さつたことなど、先生のお手を煩はせたことは数へ切れません。

私にとつて先生は、人生最大の恩師です。国語教師としての生き方を身をもつて示して下さいましたのも先生なら、私が国語の教師になつたのを一番喜んで下さつたのも先生です。私は、先生のやうな教師になり、先生のやうに生きるのが、夢でした。実際、教育実習で生れて初めて授業を担当した際には、自分の授業の進め方や予習の仕方についてU先生の影響を感じて、嬉しさを噛み締めたものです。

今年私は教師生活に別れを告げましたが、そこで私の脳裏を去来するのは、やはりU先生によつて国語の教師を目指し始めた頃のことでした。その頃の夢は果せたの

だらうか。先生の教へ導いて下さつた道をちやんと歩いて来ることが出来ただらうか。この原稿に手を付け始めた頃から、そんなことをぼんやり意識してゐたやうに思ひますが、はつきりした答はまだ出て来ません。それでも、心のどこかに、やはり先生には足元にも及ばなかつた、といふ思ひが拭ひ難く残つてゐることも確かです。

そんな先生も、数年前に到頭お亡くなりになつてしまひました。丁度、以前頂戴した短冊の中に當時を偲ばせる句がありましたので、最後にそれを掲げて、先生への感謝の微意に代へたいと思ひます。

倦まざりし かの夜学子の 机かな

(うめはら やすのり 信州大学教育学部名誉教授)

梅原 恭則 先生 略歴

御略歴

- 昭和四五年三月 東洋大学文学部国文学科卒業
昭和四五年四月 東洋大学大学院修士課程入学
昭和四七年三月 同右修了
昭和四七年四月 東洋大学大学院博士課程入学
昭和四九年三月 同右中途退学
昭和四九年四月 東洋大学文学部助手
昭和五〇年四月 同右専任講師
昭和五四年四月 同右助教
昭和五八年三月 同右退職
昭和六〇年四月 常総学院高等学校教諭
昭和六一年三月 同右退職
昭和六一年四月 信州大学教育学部助教
平成八年四月 同右教授
平成八月四月 信州大学教育学部広報・国際交流委員長（平成一〇年三月まで）
平成一九年四月 信州大学附属図書館教育学部図書館長（平成二二年三月まで）
平成二二年三月 信州大学教育学部定年退職

主要論文目録

- ・古今著聞集に於ける助動詞の相互承接 『文学論藻』四三(東洋大学文学部、東洋大学文学部国文学研究室)一九六九年
- ・副助詞の構文的職能と助詞の職能の系列について 『国語学』九五/一九七三年
- ・解説(近代語助動詞の研究) 『論集日本語研究(助動詞)』七(有精堂出版)一九七九年
- ・2種の連文機能——連文機能と文法規則との関係について 『言語と文芸』一〇六(桜楓社)一九九〇年
- ・文構造の解析と図示 『信州大学教育学部紀要』七九/一九九三年
- ・国語の授業とは——文章読解の授業について 『信州大学教育学部紀要』八一/一九九四年
- ・名詞の敬語法——対社会意識 『國文學——解釈と教材の研究』四〇(二四)(學燈社)一九九五年
- ・連体修飾節における「の」による主格表示 『言語と文芸』一一三(桜楓社)一九九六年
- ・若者の文章能力——看護学校学生の文章能力と国語教育 『信州大学教育学部紀要』九三/一九九八年